【10】

氏　名（本籍）	任（いむ）　龍在（よんじぇ）（韓　国）
学位の種類	博　士（障害科学）
学位記番号	博　甲　第　5885　号
学位授与年月日	平成23年5月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	**重度・重複障害教育における教師の職能成長に関する研究**

主　査	筑波大学教授	博士（教育学）	安藤隆男
副　査	筑波大学教授	博士（教育学）	長崎　勤
副　査	筑波大学教授	博士（医学）	竹田一則
副　査	筑波大学准教授	博士（心身障害学）	佐島　毅

論文の内容の要旨

（目的）

近年、特別支援学校においては、在籍する児童生徒の障害の重度・重複化が顕著となり、児童生徒一人ひとりの実態に応じたきめ細かな指導を行うための教師の専門性の向上が求められている。教師の専門性の向上は教員養成の充実にのみに依拠するものではなく、むしろ教師が一生涯にわたり向き合うべき課題といえる。そのため、教師自らが専門性とは何かを希求し、その専門性を身につけるために努力する必要がある。専門性に基づく実践の成果を同僚教師等の関係者に認めてもらうことにより、望ましい職能成長につながると考えられる。

本論文は、重度・重複障害教育における教師の職能成長に関して、専門性のプロセス論の立場から論究するもので、現職教育システムの再構築のための基礎的な知見を得ることを目的とした。論文は序論部、本論部、結論部の3部からなり、研究目的に迫るために本論部は、次の3つの研究によって構成した。

（研究Ⅰ）

＜目的＞重度・重複障害教育に携わる教師に求められる専門性を明らかにし、その専門性について教職経験、教育課程の類型による差異を検討することを目的とした。　＜対象と方法＞全国の特別支援学校（肢体不自由）から無作為に47校を抽出し、承諾の得られた32校の重複障害学級担任教師361名に郵送による無記名自記式の質問紙調査を行った。最終的に得られた回答者数は323名であり、回収率は89.4％であった。教師の専門性に関する項目は、予備的な手続きにより最終的には51項目を採択した。　＜結果と考察＞まず、因子分析による教師の専門性の構造を探索したところ、「専門的な知識・技能」「教育への情熱」「連携に基づいた指導力」「指導への確信」「子どもの健康管理」の5因子が抽出された。次に専門性に関する各因子を従属変数、教職経験及び教育課程の類型を独立変数に2要因分散分析を行ったところ、教職経験はすべての専門性に有意に影響を及ぼしていたのに対して、教育課程の類型は指導への確信にのみ有意に影響を及ぼすのみであった。Tukey法による多重比較によれば、教職経験年数の増加は教師の専門性の認識を高めることが示唆された。

(研究Ⅱ)

＜目的＞Hackman & Oldham（1980）の職務特性モデル（職務特性―心理状態―成果）を基に、重度・重複障害教育に携わる教師のとらえる職務特性を探索するとともに、その職務特性が彼らの職務満足感に及ぼす影響に関する内的なプロセスを検討した。　＜対象と方法＞全国の特別支援学校（肢体不自由）から無作為に41校を抽出し、承諾を得られた27校の重複障害学級担任教師352名を対象として、郵送による質問紙調査を実施した。322名の回答が得られ、回収率は90.3％であった。質問紙の作成では、まずHackman & Oldham（1980）のJDSをアメリカ留学経験のある大学院生2名の協力を得て翻訳した。その後、特別支援学校（肢体不自由）に勤務経験がある大学院生3名と研究者が、文意の明確性、回答の容易性を確保するための検討を行い、25項目（職務特性14項目、心理状態8項目、職務満足感3項目）を作成した。　＜結果と考察＞職務特性に関する因子分析の結果、「仕事の主体性」「知識・技能の多様性」「先輩・同僚から伝えられる意見や評価」「仕事自体から得られる自己評価」「保護者や他の専門職との連携」の5つが抽出された。この結果は、Hackman & Oldham（1980）の因子構造とほぼ対応するものであった。次に教職経験年数を基準に対象を経験の長い群と短い群の2群に分け、各群において職務特性モデルに基づきパス解析を行った。その結果、両群に共通して、職務特性の「仕事の主体性」と「仕事自体から得られる自己評価」は心理状態の「仕事への有意味感」に有意に影響を及ぼし、そして成果の「職務満足感」に有意な影響を及ぼすことが明らかになった。仕事を行う際に主体的に取り組む機会が多く、仕事の成果を自ら評価する機会が多いほど、教師は仕事に対して有意味感を得、さらに職務満足感を得ることが示唆された。一方、経験が長い群では「仕事に対する把握感」を通して「職務満足感」を得ており、「仕事の把握感」の水準が高いほど職務満足感を高く感じることが明らかになった。

(研究Ⅲ)

＜目的＞重度・重複障害教育の経験があるベテラン教師が求められる専門性をどのようにとらえ、その専門性を身につけるためにどのような職能成長のプロセスを経験してきたかについて半構造化面接によりに明らかにした。　＜対象と方法＞特別支援学校のベテラン男性教師4名を対象とした。対象の選定基準として、教職経験15年以上で、研究主任などの役割を担った経験があること、内地留学の経験があることを取り上げるとともに、肢体不自由教育及び重度・重複障害教育を専門領域とする大学教授が十分な専門性を有すと判断した教師を数名推薦してもらった。面接調査は①フェイスシートの記入、②専門性に関する質問、③職能成長グラフの作成、④職能成長の転機に関する質問の4段階で構成、実施された。　＜結果と考察＞ベテラン教師は「子どもの理解」、「教育への熱意」を重要な専門性として取り上げた。これらは当該教育分野における重要な専門性として注目される。職能成長の特徴としては、まず契機の内容として初任期の「出会い」に注目できる。対象者すべてが子どもや優れた同僚との「出会い」から影響を受けていることが看取できた。専門性の飛躍的な成長は、7-8年から12-13年の間に集約された。この時期の専門性として「子どもの理解」に関わる子どもを見る観点があげられた。観点の明確化は心理的な安定をもたらし、後の専門性向上の促進要因として意味づけられた。通常学校の教師を対象とした研究では、2-3年から7-8年までの時期において教授能力を含めた専門性の全般に成長が見られたとされ、重度・重複障害教育教師とは成立時期に異なる結果を得た。

(総合考察)

研究ⅠからⅢの結果から、経験の浅い教師はとりわけ重度・重複障害教育に携わる場合、経験のある教師と比較して「教育への熱意」という優れた特性を有すことが分かった。彼らに対してはその特性を低減させることなく、職務満足感を高める研修、研究の充実が有用であることが示唆された。また、研究Ⅱにおける因果モデルの検証から、仕事を主体的に取り組める機会を多く与えることや、仕事そのものから自己評価が高まるように支援することなどの有効性が指摘された。このことに関連して研究Ⅲの対象Aは、重度・重

複障害教育に携わる初任教師に授業研究を多く取り入れること、授業研究には周囲の先輩教師から指導・助言の機会を増やすことを言及しており、同僚性に基づく協働的職務遂行が注目できる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

特別支援学校では児童生徒の障害の重度・重複化が顕在化する中、彼らへの適切な教育的対応が喫緊な課題となっており、担当教師の専門性の向上が求められている。本論文では、重度・重複障害教育における教師の職能成長に着目し、量的（研究Ⅰ・研究Ⅱ）及び質的な研究（研究Ⅲ）により教師の専門性に関わる認識の構造と職能成長のプロセスについて論究したものである。特別支援教育における教師の専門性に関わる研究は、その学術的意義は叫ばれるものの、取り組みの実績及び成果はきわめて限定的である。そのような中で本論文は、当該課題に対して意欲的かつ先導的に取り組み、教師の専門性の構造及び変数間の因果については定量的に、教師の職能成長のダイナミズムについてはキャリア・ストーリー概念の導入によって定性的に抽出、検証しており、その成果は特別支援教育における現職教育に関わる資料を提供するものと高く評価できる。研究Ⅲの対象が4例と少なく、議論の一般化は慎重にあるべきとの指摘はあるものの、今後の研究の継続により方法論的な隘路の解消を期待できる。

以上のことから、本論文は特別支援教育における今日的な課題である重度・重複障害教育における教師の職能成長に関して一定の基礎的な知見を提示しており、博士の学位にふさわしい論文であると考える。

平成23年4月6日、博士（障害科学）学位論文審査委員会において審査委員全員出席のもとに最終試験を行い、論文について説明をもとめ、関連事項について質疑応答を行った結果、審査委員全員によって合格と判定された。

よって、著者は博士（障害科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。